「男らしさってやつ」

―初稿―

2022/9/30

川尻　佳司

ログライン

男らしい行動をすることに疑問を持ち、女性の天音のことが好きな麟が、天音に対して男としての行動を拒否するが、天音は受け入れて彼女と付き合う

〈人物表〉

坂上　麟（１４）　洋蘭中学２年生　２組
根本　天音（１４）　洋蘭中学２年生
下谷　陸（１４）　洋蘭中学２年生　２組

坂上　楓（１８）　アパレル店員

藍染屋　宗助（１３）　洋蘭中学１年生
松村　桜（１３）　洋蘭中学１年生

1.

街（昼）

道行く浴衣姿のカップル。それを見る坂上麟（14）と下谷陸（14）、根本天音（14）、藍染屋宗助（13）。

陸　「今日花火大会とかあったっけ？」

麟　「どっか、神奈川とかの方かな」

天音　「いいなあ」

麟　「なあ、今度の荒川の花火大会行くだろ？」

宗助　「俺、いい場所知ってんすよ、梅田中の奴に聞いたんですけど、ホームレスのおっさんたちがいる場所で……」

陸　「悪い、俺、彼女と行くんだ」

麟　「あ、そうなんだ……」

陸　「だから、今回は麟、天音と2人で行けよ」

麟　「え？」

天音、不意を突かれて顔を赤らめる。

麟　「いや、宗助も行くだろ」

宗助　「え？　俺もいいんですか、その実は……」

陸　「あー嘘、嘘……あーあ俺に彼女いればなあ、麟君ね、私たち、もう14ですよ、いつまでもね友達とつるんでなんか花火見に」

麟　「年は関係ないだろ」

陸　「あー、そうよね、人それぞれよね、じゃあ次の隅田川の花火はさ、お互いよーカップルで行こうぜ、なっ」

陸、麟の肩を叩いて、天音を見る。

麟　「強制するなよ」

宗助　「隅田川は任せてください、俺が去年……」

2.

2年2組（昼）

昼休み。麟と陸、宗助、松村桜（13）。

宗助　「坂上さん、ありがとうございます、ノート、すげえ助かりました」

麟　「おっ、いつでも言えよ」
宗助　「それで、その、こいつがその」
桜　「松村です」
宗助　「一緒に花火見に行きたいっていうもんで」
麟　「へえ、二人で行けばいいのに」
宗助　「いや2人ではまた次の機会がありますし、今回は坂上さんたちと」
桜　「この人、いつも坂上さんたちの話してるんですよ、あのプレイは坂上さんだからできるとか、坂上さんがいなかったら勝てなかったとか」
麟　「おいやめろよ、恥ずかしいだろ」

×　×　×

宗助と桜去っていく。
黙って二人を見送る麟と陸。

陸　「あいつ、俺の良いところ言ってなかったな、次の練習は教えてやんねえとな、ん、どうした麟、お前も彼女欲しくなったか？」
麟　「いや、宗助もああいう態度になるんだなって」
陸　「え？」
麟　「あんな風に、なんていうか、男っぽいつうのかな、いつもはあいつ女に対しても変わんねえのに」
陸　「あいつも古風なとこあるもんな、先輩はたてるしよ」
麟　「やっぱ、ああいう風になるもんなのかね、男と女って」
陸　「まあ、人それぞれでしょ」
麟　「お前はどうなんだよ？」
陸　「へっ、俺？　俺は……どうなんかね……」
麟　「はぐらかすなよ」
陸　「はぐらかしてるのはお前だろ」
麟　「え？」
陸　「天音のこと好きなんだろ？」

麟　「お前」
陸　「まあ別に好きなら恋人にならないといけないって決まりもないしな、だけど天音はどうかな、見たろ、あいつの恋人を眺める目をさ」
麟　「俺、わかんねえんだよな」
陸　「え？」
麟　「その男らしさっつうのかな、しっくりこないんだ」
陸　「うーん、自然なものなんじゃねえの、お前もそういう場面になったら発揮するよ、その男らしさ」
麟　「そうなのかな」
陸　「今だって宗助の彼女に言われてただろ、野球ができるとか」
麟　「それが男らしさってやつなのか？」
陸　「じゃねえの、あいつ俺のこと言ってないのがまだまだだけどな」

3.
麟の家（夜）

帰宅する麟。部屋を開けると楓（18）が漫画を読んでいる。

麟　「おい、俺の部屋で何してんだよ」
楓　「よっ」
麟　「よじゃねえよ、ていうか何、戻ってきたの？」
楓　「やっぱねえ、男は甲斐性よ」
麟　「は？　もうさ、別に姉ちゃんが戻ってくるのはいいんだけどさ、俺の部屋に勝手に入り込むのやめてくれよ」
楓　「大丈夫、大丈夫、エロ本とかチェックしてないから」
麟　「してたら、なぐるわ」
楓　「ほう、やれるもんならやってみな」

戦闘姿勢を構える楓。

楓　「ほれ、どうした？」
麟　「男ってさ、やっぱ甲斐性っていうの、必要なのかな」
楓　「……そりゃそうよ、あんた稼げない男は悲惨よ」
麟　「女だって稼ぐ時代だろ」
楓　「そりゃ姉ちゃんだってね、最初は愛があればって思ってたよ、でもね、そんなもの3か月もすれば薄れちゃうのよ」
陸　「ふーん、それまでの愛だったんじゃねえの」
楓　「……わかんないだろうなあ、うん、あんたには、あんたも経験すればわかるよ」

4.
荒川土手（夜）

射的ゲームの屋台。麟、陸、天音、宗助、桜。
桜　「ちょっと、全然当たらないじゃない」
宗助　「くっそお」
陸　「（笑いながら）宗助は全然ダメだな」
麟が見事命中させる。
桜　「さすが坂上先輩かっこいい」
麟　「……これはさ、得手不得手なんだよ、別にかっこいいとかじゃないんだ」
桜　「優しい、やっぱ坂上先輩は違うわ」
バツの悪そうに宗助。
麟　「宗助、しっかり……」
陸　「どうした？」
麟　「いや、なんでも……」

5.
弁天池（夜）

土手から少し離れたため池のほとりに麟、天音、宗助、桜。
桜　「ここでカップルのジンクスがあって、男性がちゃんと女性を抱えて、この池を渡してあげると

そのカップルはうまくいくんだって」

宗助　「よし、やってみるか」

宗助が桜を抱えてため池に打ってある杭を一つ一つ渡っていく。

陸　「天音、やってみないか」

天音　「えっ？」

麟、二人を見つめる。

天音　「……ごめん、できない」

陸　「……麟となら、できるのか？」

天音　「やめよ、別にそういうことじゃないから」

陸　「麟、どうするよ」

麟、天音に近づいて抱きかかえようとするが、やめる。

麟　「……ごめん、俺できない、その男らしいっていうか、女が求めることできないんだ、演じるのも違うって思うから、ごめん」

陸　「はっ？　お前、天音のこと好きじゃないのか？」

麟　「その、でもそういうことができるのが好きっていうことだったら、多分違うんだ」

陸　「麟……」

天音　「わかる、男だけじゃなくて女もそうだよ」

麟　「天音……」

陸　「天音はどうなんだ、そういうの？」

天音　「きっと男とか女とかじゃなくて、相手のためを思いやっていればいいんじゃないかな」

麟　「そう、そうだよな」

陸　「なんだよ、結局うまくいくんじゃんお前ら、ったくよ、帰るぞ」

宗助と桜が向こう岸で待っている。

（終）